予告 Future Event

企画展 3

Pass- About cadence of the space MEDIA ART FROM TAIPEI

2006年10月27日［金］—11月8日［水］
12:00→18:00（10月29日のみ休館 最終日は17:00まで）
会場：名古屋芸術大学アート＆デザインセンター［入場無料］
後援：日本映像学会中部支部

レクチャー　10月19日［木］14:30—16:00
レセプション　10月27日［金］16:30—18:00

アジアの現代美術は非常に活発な動きがありますが、特に台湾のアートシーンは国際的な動きを見せています。本展では、台北（台湾）のIT Park Art Gallery を拠点に海外へも発信しているメディアアーティスト3名（Tsong Pu, Chen Hui-Chiao, Lai Tsun Tsun）によるインスタレーション作品を展示いたします。また関連企画として学内での滞在制作、出品作家によるレクチャーも行います。

Lai, Tsun Tsun（Jun T. Lai）
「After monochrome」2006

Tsong Pu
「Not about Taipei」2006

Chen Hui-chiao
「Inside of Memories」2006

企画展 2

ジョージ・ハーディ展「Manual・マニュアル」

2006年10月5日［木］—10月18日［水］
会場：名古屋芸術大学アート＆デザインセンター［入場無料］
後援：株式会社国際デザインセンター／ブリティッシュ・カウンシル
財団法人日本グラフィックデザイン協会
オープニングレセプション　10月5日［木］16:30—18:00

アート&デザインセンター
9 EXHIBITION SCHEDULE 12
展覧会スケジュール

Open 12:00—18:00
（最終日は17:00まで）
日曜・祝祭日休館
但し、9/17［日］、11/3［金］、
11/5［日］は開館いたします。

［入場無料］どなたでもご覧いただけます。

9/16［土］→ 9/17［日］	「動物園、そう言えば行ってないね」
9/22［金］→ 9/30［土］	"Come dy" ソフトスカルプチャーへ展 VI
10/ 5［木］→10/18［水］	企画展2 ジョージ・ハーディ展「MANUAL マニュアル」
10/20［金］→10/25［水］	幼稚園児たちのゲイジツ展
10/27［金］→11/ 8［水］	企画展3 「Pass- About cadence of the space」Media art from Taipei
11/10［金］→11/15［水］	洋画大学院＋教員展
11/18［土］→11/29［水］	境界から見えるもの（仮）
12/ 1［金］→12/ 6［水］	工芸選択コース作品展
12/ 8［金］→12/13［水］	日本画3年作品展
12/ 8［金］→12/13［水］	古美術デッサン展
12/15［金］→12/20［水］	名古屋芸術大学後期留学生作品展
12/21［木］→ 1/ 5［金］	冬期休館
1/ 9［火］→ 1/13［土］	JAGDA新人賞受賞作家作品展2006

Art & Design Center
名古屋芸術大学アート&デザインセンター　〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地 tel.0568-24-0325　tel/fax.0568-24-2897

編集後記

9月に入り、虫の音が秋の気配を運んでくれます。野外展というと、Bleでは何度か紹介している愛知県の佐久島もはずせません。こちらは企画展として毎年アーティストが選ばれ、展示期間終了後もいくつかの作品は島内に展示されています。やはり、アーティストと住民、サポーターとの「協働」、継続していく「時間」がプロジェクトを成熟させているように思います。

アート＆デザインセンターでは秋の企画展やイベントの準備がピークを迎えています。今年は10月に英国のグラフィックデザイナー、ジョージ・ハーディ展と台湾のメディアアートを紹介する企画展を続けて開催します。どちらも作品展示だけでなく滞在制作、ワークショップ、レクチャーも予定しています。

Ble　Vol.14
発行日　2006年9月16日
編　集　江坂恵里子（アート＆デザインセンター）
発　行　名古屋芸術大学アート＆デザインセンター
〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地
Tel. 0568-24-0325　Fax. 0568-24-0326（代表）
Tel/Fax. 0568-24-2897（直通）
E-mail adc@nua.ac.jp
URL http://www.nua.ac.jp
デザイン　岩田知人（サンメッセ株式会社）
印　刷　サンメッセ株式会社
2006 Printed in Japan

© Art & Design Center, Nagoya University of Arts

最寄りの交通機関をご利用の場合
名鉄犬山線（地下鉄鶴舞線乗り入れ）
徳重・名古屋芸大駅下車西へ約1,000m徒歩15分
※急行・準急電車の場合は西春駅で普通電車に乗り換えるか下車してください
中部国際空港からも名鉄犬山線をご利用ください
西春駅から北西約2,200m徒歩25分、西春駅からはタクシーの便もあります

自動車をご利用の場合
名神一宮インターから10分、名神小牧インターから15分。

大学基準協会認定マーク
本学は2006年4月に認証評価機関である大学基準協会の大学基準に適合と認定され、正会員になりました。
認定期間は2006年4月から2011年3月までです。
これによって法令化されている「第三者による認証評価」にも合格したことになります。

NAGOYA UNIVERSITY OF ARTS
名古屋芸術大学

B!e

2006 Vol.14
ART & DESIGN CENTER NEWS

特集 in the open

野外展の系譜

この夏、「第3回越後妻有アートトリエンナーレ　大地の芸術祭2006」が開催された。新潟県を襲った中越大震災を乗り越えて、里山の自然とアーティスト、地元住民そしてボランティアによる"協働の美術"が実現したのである。

ここでは、戦後美術における「野外展の系譜」として"野外であること"の意味をひもといてみる。さらには、いまだ検証が十分ではない、当地でも知る人ぞ知る野外展：通称「長良川アンデパンダン展（1965年）」を紹介してみよう。（文中敬称略）

グループ位『穴』は、会期8日目に直径10m、深さ1.5mに達し、残りの2日間で埋め戻された

「アンデパンダン・アートフェスティバル」
1965年8月9日（月）～19日（木）に開催

水谷勇夫（名古屋）は、家族で川原に滞在し、野焼きのオブジェを現地制作した

池水慶一は、自らが檻の中の展示となった

大地と空と／なぜ野外展なのか？

野外であることは、実はアンビバレントな状況であるとは言えないだろうか？屋根の無い自然空間に美術が解き放たれる、晴れ晴れとした感のあるそれは、同時に"公共"という意味と制約を持った地面に立地することでもある。

美術館や画廊などの美術のための専用空間や制度から脱した、オフミュージアムの理念による実験的な美術展。そもそも戦後日本美術においての出所はどこにあるか？個人としてではなく、組織的に野外であることに積極的な意味を得て実施された例は、思い当たるところでは、**1954年7月の具体美術協会による「真夏の太陽に挑むモダンアート野外実験展」（芦屋川河畔）**、指導者：吉原治良の「人の真似をするな、今までにないものをつくれ」との提唱が、野外展ならではの作品を誘発したのではないか。つまり、アクションなど既存の作品形式からも開放された作品が、この野外展だからこそ生まれてきたといえる。

さらに「反芸術」「反東京」を謳った**九州派は、1956年に旧福岡県庁外壁を使った野外展「ペルソナ展」**を助走に、1962年には百道海水浴場での**「英雄たちの大集会」**を敢行した。前衛芸術が活気づいた60年代の野外展とは、「反権威」としての行動であり、野外の意味は、"在野"であることの証しでもあった。

アンデパンダン・アートフェスティバル

1965年8月、岐阜市の市民センターと金公園、さらに長良川畔上流右岸一帯を舞台とした全国規模の「アンデパンダン・アートフェスティバル（現代美術の祭典）」が開催された。おりしも63年の第15回展を最後に突然中止となった「読売アンデパンダン展」を継承すべく、評論家・針生一郎の呼びかけで64年には作家の自主組織・運営の「アンパン」が開催され、さらには地方の作家たちが、そのネットワークを駆使して各地域で「アンパン」を蜂起しようという気運が高まっていた。

岐阜県関市の前衛芸術集団「ＶＡＶＡ」は、病院院長であり地方の名士としての政治力も備わった西尾一三（いちぞう）が率いたグループ。西尾は公務員や教員など若い仲間を率いて、ＶＡＶＡは「全国に散在する一匹狼の総決起大会である」と、地方発信のアンパン実施の名乗りをあげた。

個を超えて

この「長良川アンパン」の特徴は、前例のない河川敷での野外展であり、岐阜市と中日新聞の後援を得ながら、実験的な内容の展示が敢行されたことである。ＶＡＶＡの面々は、岐阜ならではの風土を主張すべく、さらには大衆と交歓できる場としての長良川を選択したのであった。後に伝説となったのは、河口龍夫をはじめとした神戸の「グループ位」による『穴』。その名のとおり、川原に巨大な穴をひたすら掘るという、コンセプチャルな作品である。ここでは、作家の自我や個性を重視してきた近代以降の美術に対しての問い直しが顕在化した。

野外彫刻の時代へ

60代の衛生を中心に述べたが、野外彫刻がフォーマルに展開したのは、**1961年「宇部市野外彫刻展」、63年には「世界近代彫刻日本シンポジウム」（朝日新聞主催／神奈川県真鶴町、道無海岸採石場）、64年からは「現代日本彫刻展」（宇部市常盤公園）**が継続され、**68年からは神戸須磨離宮公園で「現代彫刻展」**が隔年で開催されるようになった。

70年代は、いわゆる「彫刻のある街づくり」事業が各地で開催されるようになる。ここからが「野外彫刻」の正史として位置づけられ、日本におけるパブリックアートのルーツとして解されるだろう。それらは文化事業として、経済行為として、まだまだ論じなければならないが、また別の機会に譲りたい。とはいえ、戦後美術を活気つけた一面として、60年代の野外展に注目し再考することは、あながち的外れではあるまい。そこには野外展でこそ自覚された、制度や造形に対する、作家の意志が垣間見られるからだ。

高橋綾子（美術学部美術文化学科助教授）

写真提供：池水慶一氏

特集 in the open

第3回越後妻有アートトリエンナーレ 大地の芸術祭2006

760平方メートル、東京都23区がすっぽりおさまる広大な会場に330を越える作品が展示されている。各作品展示を見るために私たちは山道を登り、歩く。そして、そのプロセスこそが重要なのだと気づかされる。里山、鎮守の杜、棚田、径庭(みちにわ)。また今回特に多くの会場として使用された廃墟、廃校となった小学校や分校などから見える過疎化・高齢化の厳しい現実。そして時折見せつけられる震災の爪痕。地域復興事業の一環として始まったこの野外芸術の祭典を通して、私たちは「協働」というキーワードと作品を囲む「場」や「人」、「歴史／時間」を強く意識することになる。「アートのちから」を数字や論理に置き換えることは難しいが、そこには人を動かす何かがある、と強く感じる。

ここでは2006年の出品作品の中から、本学と関わりのある参加アーティストたちの作品を紹介する。

写真はイリヤ＆エミリア・カバコフ「棚田」(松代町能舞台)

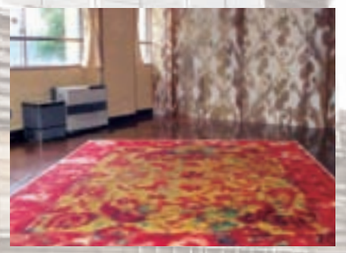
磯部 聡 + 船山の衆（美術学部造形科非常勤講師）
MOTION & EMOTION 2006 – 俺たちの芸術祭 –
前回2003年に続いて2回目の参加。
今回も越後妻有との関わりの中から、集落住民との協働でインスタレーションを展開。(津南町船山集落)
写真提供：磯部 聡

芝 裕子（1998年美術学部彫刻科卒業）
大地のグルグル
大地の恵みとしての稲作。その藁を使った直径12mの野外インスタレーション。
昨年の6月から現地入りし、刈り取りから設置まで、集落の住民やサポーターとともに、1年以上かけて制作された。
グルグルの内部は片道60mのトンネルになっており中心には小さな水田が作られている。(中里村東田尻集落)
写真提供：芝 裕子

福武ハウス in 越後妻有アートトリエンナーレ2006
福武総一郎氏（ベネッセアートハウス直島代表・財団法人福武直島美術館財団理事長）の提唱・主催により、越後妻有アートトリエンナーレの今後を見据えてスタートした新たなプロジェクト。
初参加となる今回は、現代美術を意欲的に紹介している7つのギャラリーから11人のアーティストが現地制作によるインスタレーションやパフォーマンスを行った。(十日町市名ヶ山・旧名ヶ山小学校)

石松 丈佳（1988年美術学部デザイン科卒業）
田野倉環境感知器
「環境感知器」とは環境の変化や特性を感知し、視覚化する装置である。ここでは雪のかさを軽減する融雪池と、廃校となった後に雪で倒壊した小学校にその特質を見出し、その廃材（梁）を利用して制作された。
山桜の下に設置された環境感知器（緑台／池）。春にはゆったりと緑台に寝転びながら、池にひらひらと浮かぶ桜の花びらによってこれらの「場」を可視化させるだろう。
(松代町田野倉集落)

鬼頭健吾(2001年美術学部絵画科卒業)
「無題」2006年



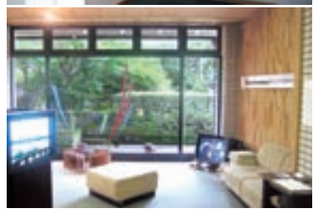
染谷亜里可(美術学部絵画科非常勤講師)
「Soak(浸透)」シリーズ Soak-Carpet , Soak-Wall 2006年

SLIPPED DISK / 椿原 章代（1988年美術学部デザイン科卒業）
もじもじ pictures NO.39「えちごつまり」のアート
子どもとアートのワークショップ＋展覧会シリーズ。
国や土地を現した言葉を分解し、図形化したかたちに参加者がそれぞれのアイデアで色や絵を描いていく。
海外や他府県、妻有の子どもたちが描いた絵を床一面に展示。(十日町市キナーレ内)　写真(左)提供：椿原 章代

レビュー REVIEW レポート

物語をつむぐこと —起周辺のフィールドワークから—

2006年7月19日 – 23日
一宮市尾西歴史民俗資料館 展示ギャラリー



大学院の映像表現演習という授業の一環として行なわれたもので、サブタイトルにもあるように、一宮市起地区を歩き、出会った人や物などに動機づけられ、調査記録をもとにしてアート作品に仕立て、展示形式での発表である。タイトルに「つむぐ」とあるのは、この地がかつては繊維産業がさかんであったことの寓意だろう。

フィールドワークとは、社会学や民俗学などで用いられる調査・研究の手法である。わたし自身は「事前に答えを用意しないで現場を体験し、自らの問題意識から率直に感じたままを語ること」ととらえているが、その実践は簡単ではない。しかも授業という制約の中で、フィールドワークからアート表現へと展開させ展覧会を開催することは難度が高い。まして地元での発表となると、調査や視点がいい加減だとすぐバレてしまう。

定点撮影した往来の様子を元にした映像や、かつて木曽川にあった舟橋をＣＧで再現した作品などの「映像表現」以外にも、調査報告のような形式や、繊維産業を支えていた女性の髪型を刺繍で描いた作品などさまざまな表現がなされていた。

「20 年目の近況報告」には、「物語」を通り越したドラマがあった。尾西歴史民俗資料館の展示品の中に、書道家が赤ちゃんの頭髪でつくった筆で書いた書を見つけ、なんとそれが自分自身だったことから、書道家の彫刻をつくって当時の新聞記事と共にインスタレーションした。いずれの作品も力作だが、アート作品としての完成度よりも、現場で得た何かを伝えようとする姿勢は、自らの表現に良い影響を与える予感がした。

指導された谷本先生や、映画上映などの協力をされた池側先生のバックアップにより企画に奥行きも出て、完成度の高い展覧会となった。地域の人たちも多数来場され、好評だったと聞いた。

デザイン学部 デザイン学科
助教授　佐藤英治

真夏の昼の夢 《ニキニキ・カーニバル》

2006年7月25日・8月1日・2日
名古屋市美術館（ニキ・ド・サンファル展）

《ときわDEわくわくトリックランド》

2006年7月29日・30日
豊橋市ときわ商店街

撮影：福岡栄

子どもたちがニキ・ド・サンファルの作品と対話し始めるのに長い時間はかからなかった。ニキの『昨晩見た夢』がカラフルな粘土の世界になって池に浮かび、「ニキってなに?」という疑問は風をふくんだ大きなモニュメントの答えとなって宙に浮いた。ナナ噴水がしぶきをあげ、水鉄砲は白いシャツに色模様を飛び散らせ、ナナしゃぼん玉は『グゥエンドリン』のように膨らんだ。これらは猛暑にも負けない小学生たちが挑んだ名古屋市美術館のワークショップ《ニキニキ・カーニバル》である。これとは別に、豊橋市の新しい子ども施設のためにプレイベントとして、視覚や遊びの〈トリック〉をテーマに光や色や動きのスペースを商店街の空店舗に埋め尽くした《ときわ DE わくわくトリックランド》では２日間に約 1400人の親子が参加した。

撮影：福岡栄

今年の夏、美術文化学科の学生たちは１週間に５日間のワークショップと搬出入の３日を含めるとプロ顔負けの仕事量をこなしたことになる。どの活動も学生にとっては、子どもたちを見守りながら新しい考えや発想をどのように広げさせることができるかが重要なポイントだった。大学では見せない表情と知らぬ間に反応している心と体の動きに、学生たちの個性が反映していた。その時、「先生、大変だ」と嘆いていた仕事の〈量〉が、学生自らも納得する〈質〉に転化する瞬間を見たような気がする。それは束の間の“真夏の昼の夢”だったのだろうか。

美術学部 美術文化学科 助教授　前田ちま子

トリック劇場

色のトリック体験

RELAY ESSAY

ミラノ・マジカに潜んでいる一つの遠近法の傑作 …… キアラ・ザンボルリン

ミラノは私の生まれ育った町です。イタリアにはミラノよりもっと美しい町が沢山あるのですが、私の故郷を大好きな日本人は少なくありません。ミラノというとファッションの都、スカラ座、株式市場、工業都市等を連想します。しかし私のミラノは、キラビヤカに目立つおしゃれな中心街よりも、静かに潜んでいる神秘的なミラノです。このミラノを私は「Milano magica」つまり「不可思議なミラノ」と呼びます。ミラノには不可思議な場所がいろいろあります。今日はその一つをご案内します。

Duomoの広場から、Via Torinoを入り、左にしばらく歩けば、靴屋と洋服屋の間に、小さな教会の入り口の前庭が現れます。その教会は Santa Maria in San Satiro と呼ばれています。とても古い教会で（876年に建てられました）地味な建築です。しかも二つの大きな建物の間に挟まれているので、外から見るとあまりたいしたことのない教会だと思われるのも当たり前です。しかし、教会の中に入ると、目が祭壇の上にある立派なヴォールトのような天井（半円筒天井）に奪われてしまいます。でも、祭壇に近付けば近付くほど、圧倒されます。目の前でその深いヴォールトの姿が消えてしまうからです。本当は、この教会が非常に狭い所に立てられているので祭壇の後ろにはたった一つの壁しかありません。ルネッサンス時代に、教会の空間に何らかの深さを与えるために、ブラマンテと言う建築家が呼ばれました。祭壇の後ろにある壁に、ブラマンテは石膏とペンキだけで立派なまぼろしを作りました。つまり、そのヴォールトと言うのは本物ではありません、遠近法の傑作です。もしかすると、建築において、世界一の遠近法の傑作です。

私はミラノに帰ったら必ずこの教会に立ち寄ります。心に安らぎを与える魅力的な所であるからです。さらにこの教会にはもう一つの宝物が潜んでいます。奇跡をもたらす聖母マリアの古いフレスコ画です。しかし、これは別の Milano magica の物語になります。

音楽学部教養部会講師